

---

# 異なる世界でセカンドライフ（職業？一応シーフです。）

テツワン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異なる世界でセカンドライフ（職業？一応シーフです。）

### 【Nコード】

N6012S

### 【作者名】

テツワン

### 【あらすじ】

突然真っ白な空間に立っていた青年、神様の部下のミスでどうやら死んでしまったようだ。神様の選択の中から青年は選択し異世界に旅立つ事に。この先青年を待つのはどのような運命なのか・・・。（初投稿で初めての小説です。かなり拙い文章になっていますが、生暖かい目で見守ってくださいれば幸いです。）一応初期設定では主人公はシーフ予定ですが、盗賊みたいな感じでなく、トレジャーハンターとか冒険者みたいな感じですか。予定では勇者や仲間と魔王退治にも行きます。ってかメインです。主人公がチート気味になると

思いますが、なるべく成長させていきたいと思っています。たぶん、不定期投稿ですが、どうぞよろしく願います。後、最近良く言われますので、先に言いますが、この作品の主人公は関西弁をしゃべる設定にしているので、読み難い所があります。注意して下さい。

## プロローグ(前書き)

4 / 25 修正しました。

内容は変えていません。

多少読みやすくなったはず……。

## プロローグ

どうして、こんなことになったのか……。

目の前には、真っ白な空間が広がっている……。  
周りを見渡しても何ひとつ誰ひとりいない……。

どうしても思い出せない……。記憶の最後は近くのコンビニから帰るところで途切れている……。

どんなに思い出そうと思っても、コンビニ帰りの交差点で途切れ、そこから先が思い出せない。

なぜ突然こんなところに、なぜコンビニの袋を持ってないのか、ここはどこなのか、疑問が浮かんでは消えていった。

「何が起こったんやろうな……。」

他に誰もいない空間でポツリとつぶやいてみたのだが。

「まあ、誰が聞いているわけ」「ご説明いたしましょうか?」「でも……。……!」

突然の後ろからの声に正直かなりびびった。振り返ると真っ白いローブのようなもの着たいかにもな人がいた。容姿は、白髪というよりは銀髪に近く、瞳がブルーで、20歳前後のイケメンだった。

「あの、どちら様でしょうか?」

テンプレ的ではあるが、とりあえず聞いてみた。

「神です。」

これまたテンプレ的な答えが返ってきた。

まあともあれ、状況がまったくわからないのでとりあえず質問してみた。

「ここはどこで、なぜ私はこんな所にいるんでしょうか。」

「ここは、天国と現世との狭間の世界です。そしてあなたは、私の部下のミスで死んでしまいました。」

「……………死んだ……………?」

いきなりの衝撃的事実に正直、頭がついてきていない。

「ちょっと待って下さい！死んだって、えっ！俺が！なんで！そんな記憶は一切ないんですが！」

「それはあなたの精神を守るために死の記憶を削除させていたからです。ひどい状態だったので、あなたの心が壊れてしまう可能性があった為に削除しました。」

(ひどい状態って、いつたい俺の身になにがあったんやろうか・・・)

「何があつたか説明していただいても良いでしょうか。」  
混乱する頭を整理する為にもまずは情報が必要だ。

「そうですね。まず、あなたがどのようにして死んだかと言うと、暴走した車に轢かれて全身骨折に内臓破裂、ほぼ即死状態でした。本来なら悪事を重ねていた運転手のみ死ぬ予定だったのですが・・・」

「運転手のみって、私も死んだんですよね。それにさっき部下のミスって。」

「本当にすみません。本来なら誰もいない交差点で、信号機に激突して炎上、そして運転手死亡と言うことになるはずだったので、部下のミスで反対側の信号待ちをしている女の子の方に向かってしまつて、それを助けたあなたも巻き込んでしまつて・・・」

どうやら彼は人助けをして死んでしまつたらしい。  
お人よしもいいところである。

「女の子は無事だったんですか。」  
「軽い擦り傷程度で、命に別状はないですよ。」  
「そうですか・・・」

(正直、記憶がないんであまり感情はわかんけれど、女の子が無事でよかった。これで死なれてたら、無駄死にもいいところやつたな。)

「それでこれから私はどうなるんですか……。」  
まだ理解しきれていないが、わざわざ神様が謝罪に来たのだから、何かあることだけは確かであった。

「あなたにはいくつかの選択しを用意しました。」

神様が言うにはこうだ。

1 従来の死と同じように、魂を浄化され新たな生を受け元の世界に人として転生する。

この場合、魂が浄化されるので 人格、記憶共に完全に消去される。

2 人格、記憶共に残るが、どんな生物になるかランダムで選ばれ元の世界に転生する。

人間以外の生物になって人格、記憶があってもあまり意味が無い。ある意味辛い。

3 異なる世界に転生、人格、記憶共に残る。

人型の生物に転生できるが、環境や成長によって人格が変わる可能性が大きい。

4 異なる世界に肉体を再生して転送。

人格、記憶、肉体、すべて元どおりになるが、異世界に転送される。

元の世界に肉体を再生しての転生はできないらしい、その世界での死が確定しているため魂が消滅してしまうらしい。

「時間はございますのでゆっくりと考えて下さい。」

まだ気持ちの整理はついていないが、ミスが原因で死んだとは言え本来なら無条件で1になるはずだったのだが、自ら選択できる機会を得たのは不幸中の幸いだったのかもしれない。

（まず1と2は、元の世界に転生できるが内容が辛いな、1は論外やし、2は運の要素が高すぎる。）

（3は子供時代から現在の記憶を持っているんでメリットは多い、デメリットは人格が変わる可能性がでかい事やな。）

（4はメリット、デメリット共に少ないが、今までの自分でいられるんがいいな。）

「実質、3か4か……。」

確かに3はメリットが多い、だけど人格が変わる可能性と人型の生物がどんなものになるか、もし半魚人やリザードマンのような生物になつたら微妙だ。

（やっぱり、確実に人間として生きて、しかも自分自身として生きれる4が妥当かな……。）

「ちなみに、異なる世界とはどんな所なのですか？」

「文明、科学レベルは落ちますが、魔術や法術などがあります。そして様々な種族が住んでおり、大きな一つの大陸と中小の島によって形成された世界ですよ。」

「魔法があるんですか!!!!」

(おいおい、かなりファンタジーな世界やな。)

「ちなみにモンスターのな生き物はいるんですか？」

「魔物ですか？いますよ。ちなみに勇者も魔王もいますよ。」

(ほんまにファンタジーやな、となると……4あかんやん・  
・魔物の強さがわからんけど、多分即死やん……。となる  
と3やな……。でも一応聞こうか。)

「ちなみに4を選んだ時は、能力強化的なことしてもらえますか  
？」

「本来なら出来ないのですが、今回はこちらに非がありますので  
特別に強化しましょう。ですが、

肉体強化は相性がありますのでどんな所が強化されるかはわかりま  
せんよ。全体的な底上げ少しと相性の良い能力といったところでし  
ょうか。普通の魔物には負けないレベルにはなりますよ。」

(能力強化できんのかよ！かなりチートくさいけどこれは嬉しい。  
となるとやはり4で決まりやな。)

「神様、決めました。4の自分のまま異なる世界に転生、強化付  
きでお願いします。」

「本当に4でいいですね。」

(後悔が無いと言えば嘘になるな。まだ20年しか生きてないし、  
家族や親友にもちゃんとお別れも言えてないし、まだまだやりたい  
事もあったけど、こうなってもうたらしかたない！異世界で新たな  
人生を生きていこう。今度こそ後悔の無い人生の為に！)

「お願いします。もう一度もらった命ですから精一杯生きます。」

「……分かりました。それでは、あなたの新しい人生に幸  
多き事を祈ります。」

神様がそういうと、足元に魔方陣が現れそして俺の意識が徐々に  
薄れていった。

## プロローグ（後書き）

初投稿でかなり駄文ですいません。

誤字、脱字、感想、批判、色々お待ちしてます。

4 / 25 主人公の考えを関西弁に修正しました。  
後、肉体強化から能力強化に変更しています。

**第1章 1話 旅立ちの準備（前書き）**

設定が甘いかもです。

4 / 2 5 修正しました。  
内容は変えていません。

## 第1章 1話 旅立ちの準備

.....ツ.....

徐々に覚醒していく意識の中で瞼に強い光を感じる。

ゆっくりと目を開ける。

そこに広がっていたのは一面の木々だった。

自分が立っているのが高い丘の上のようで遠くまで見渡せれる。

丘の周りは深い森で、辺りには文明的なものは見えない。

空を見上げると.....

.....太陽が2つある。

「あはは.....太陽2つて.....本間に異世界に来てしま  
つたんやな.....」

つぶやいた言葉が、見上げた雲ひとつ無い空に吸い込まれていっ  
た.....。

とりあえず、体を動かしてみる。

神に強化して貰って初めて体を動かすので少し緊張する。  
腕を曲げ、手を握りつてみたり、屈伸してみたり。

「どうやら違和感はないみたいやな。」  
どこがどんな風に強化されたかまだ解らないが、今までと同じように動く体に少し安心する。

『落ち着かれましたか？』

突然、頭に直接響いた声にかなりびびったが、先ほどまで聞いていた声だった。

「神様ですか？大丈夫です。落ち着きました。」

(念話って……チートですな……。ってか、さっきい感じに送り出してくれたのでは……。?)

(考えるだけ無駄やなあ。)

『それは何よりです。では、今からあなたにこの世界のある程度の知識を与えます。言葉や文字などが解らないと不便でしょうから。』

(神様突然ですな……。そして、神様はやはりチートのようだ。でもまあ、英語ですら苦手な語学力のない俺にとってはかなり有り難い申し出や。ここは素直に……。)

「よろしくお願いします！」

(なぜか誰もいないのに頭を下げてしまった……………ハズい

)  
(まっ、根っからの日本人やからしょうがない……………でも  
やっぱハズい!!!)

『分かりました。では始めます。』

(神様見事にスルーなんやね……………)

(少しでも反応がほしかったわ……………)

そんなことを考えていると、体が光に包まれ、何かが頭に流れ込  
んでくる不思議な感覚に支配された。

しばらくすると、徐々に光が消えていき。

『終わりましたよ。これで言葉、文字、ある程度の知識は解るよ  
うになりましたよ。』

(なるほど、言葉、文字は対象が無いのでいまいち分かんが、  
ある程度の知識は理解できた。)

「言葉や文字はまだ分かりませんが、知識は分かりました。」

『では次に最低限の物資を転送しますね。』

(確かに今は服しか無い状態やしな……………このままやったら、  
あつという間にお陀仏やろうな。)

(本当に何から何まで有り難いことやな。)

『最低限ですので、この世界の服、お金、地図、近くの村までの  
食料、ナイフ、ショートソード、毛布、布袋、回復薬、解毒薬を転

送らせていただきます。』

(最低限でもそんなにくれるんか！)

『この辺りには比較的弱い魔物が多いですが、中には毒を持っているものもいるので気をつけて下さいね。』

(そうだった、この世界には魔物がいるんやった……。元の世界で剣術も体術もやったこと無いし、かなり不安やわ……。)

『まあ、この辺りなら、あなたの能力ならよほどの事が無い限り毒以外の攻撃で死ぬ事は無いと思いますよ。』

(毒以外で死ぬ事がないって事は毒ではポツクリいつちやうわけや……気をつけよう。まあ、解毒薬も貰えるみたいやし、なんとかなるか。)

「分かりました。よろしくお願いします。」

『それでは転送いたしますね。転送しましたらあなたに干渉するのは最後になります。』

「そうですね……色々ありがとうございました。この世界で頑張ってみます。」

(不安はあるけど、この世界で生きると決めたんや。頑張ってみよう！)

『頑張つて下さいね。それでは転送します。』

神様からの念話が終わると目の前に荷物が現れた。

（なんか今回、神様あっさりしてたな……。でもまあ、数々のチートをありがとう神様！）

「なにはともあれ、まずは情報整理やな。」

まず自分がいる場所だが、大まかな所で言うと、大陸の南東にいる。

この世界には大陸は一つしかなくMの上の隙間をなくして、丸みを着けて横に伸ばしたような形だ。あとは大陸の東に島国があるようだ。

この世界には魔法があり、生物を殺したり、魔物を殺した時にその生命力を吸収して自分の能力を上げる事ができるらしい。

ただ、あまり爆発的な能力の伸びは普通は無く、徐々に上がるらしい。

ゲームのRPGとほぼ同じである。

「折角の異世界やし、強くなれるんやったらなりたくない。とりあえずは、地味に弱い魔物を倒していこうかな。」

人型種（盗賊や人殺し、魔物などは対象外）を殺す事は倫理的に禁止されている。

人型の種族としては、人間、エルフ、ドワーフ、獣人、龍族、魔族などがいるらしい。

文明レベルは中世ぐらいで、科学の代わりに魔法が発達している。魔法を使うには、ある程度訓練する必要がある。個人差による強

弱はあるが誰でも使える。

近くの村までは大体歩いて5日程の距離で森を抜けて行かなくてはならない。

「とにかく村まで移動しないと詳しいことは分からんか……。まずは、荷物の確認やな。」

目の前にはショートソード、ナイフ、ブーツ、布袋があり、袋には食料、水筒、毛布、地図、お金の入った袋、小瓶二つ（たぶん薬）、黒い布のズボン、白いシャツ、厚手の黒い革ジャンのようなものが入っていた。

「パンツと靴下がなぜ無いかは分からんが贅沢はいえんな。とにかく着替えるか。」

さすがに今着ているジーパン、赤いパーカー、スニーカーでは目立ちそうな感じがするので、まずは着替えた。

（さすが神様コーデイナイト！サイズぴったり！たぶんオシヤレ！きつとオシヤレ！お願いオシヤレであって……！！）

……とにかく、着ていた服などを袋の底のほうにしまい、荷物を詰めなおした。

お金の入った小袋を確認してみると、金貨が5枚、銀貨10枚、銅貨10枚が入っていた。

大体の物価で換算すると、銅貨が1000円、銀貨が10000円、金貨が100000円になるようだ。

金貨の上に白銀貨があり、1枚10万円で、白銀貨の上に宝石貨があり1枚100万円だそうだ。

まあ、現物が無いのでどんな物かはわからないが……。  
つまり日本円で言うと、ただいまの所持金は61000円となる。  
金额的にみれば微妙だが、まあ、ただで貰ったものなので贅沢は  
いえない。これだけあれば村でしばらく困ることはないだろ。

「村に着いたらまずは宿探しと仕事探しやな。」

（なんだか、独り言が多くなってきたがしょうがない……話  
相手がいないんだもん！）

（でも、あまり増えるとアレな人やとおもわれるんで注意しなく  
ては……）

とにかく、出発しなければじまらないので、ショートソードを  
左腰のベルトの間に挿し、ナイフをベルトの後ろ側に取り付けて、  
布袋を背負い。

「出発するか！」

と、最後まで独り言の多いアレな人だが、とにかくにも異世界  
での初めての旅が始まった。

## 第1章 1話 旅立ちの準備（後書き）

くらしいが多いのは主人公が自ら得た知識ではないからです。

基本的に主人公は関西弁ですが、緊張したり、丁寧に話す時は標準語になります。

今回はほとんど説明になってしまいました・・・

次は戦闘描写に挑戦したいと思います。

初めての小説で設定がアマアマなのでシッコミお待ちしております。

誤字、脱字、感想などお待ちしております。

2話 命のやり取り(前書き)

戦闘シーンむずい。

4 / 25 修正しています。

内容は変えていません。

## 2話 命のやり取り

丘を出発して気が付いた事がある。

明らかに元の世界の頃よりも体が軽く感じるのだ。

それに、これだけの荷物を背負い、移動しているにも関わらずほとんど疲れていない。

運動は得意な方だったが、それも一般的なレベルの話でだ。

何より驚いたのが、スピードが桁違いに上がっている事だ。

ただ単に脚が速くなっただけでは無く、体のキレが尋常ではないのだ。

「どうやら神様が言っていた通り、全体的な能力の底上と相性で俊敏さが特に伸びたみたいやな。」

木々の間をかなりの速度で擦り抜けて行く。

「まるで、赤い〇星のようやな……3倍のスピードはでてるやろ！」

何に対して3倍なのかわからないが、自分の身体能力が上がった事にテンションがおかしくなっているようだ。やはりアレな人なのだろう。

3時間程移動すると川が流れている開けた所に出た。

「とりあえず休憩するか。」

強化されてるといっても3時間ぶっ通しで移動したので普通に疲

れる。

それでも、この3時間の移動で一般人が大体1日かかる距離を移動してきたのだ。元の体では考えられない速度である。

川の近くの岩に剣を立て掛けて腰を下ろし、昼飯？を食べることにした。

食料は保存食のようで、干し肉やクラッカーのようなものだけだったが、5日分と言う事もあり、結構量はあった。

香辛料の効いた塩気のある干し肉はそこそこ美味かったが、クラッカーのようなものはかなりパサついている。まあ、無いよりはマシって感じだった。

「少し物足りへんけど腹八分目っていうしな、何があるか分からんから抑えとかなあかん。」

何気にフラグを立てた気がしないでもないが……

まあ、腹を満たし、少し落ち着いた所で地図を開き現在地を確認する。

出発した丘から見て村は北側にあり、東側に山脈があり、山脈は南北に続いている。中央と西側に森が広がっている。丘と村までの間には山脈から2本の川が流れており、1本目は現在いる地点で2本目は村の近い所を流れている。

村は森の入り口付近にあるので、東側の山脈を目印に北に向かえば迷う事はないはず。

ただ、地図は絵で書かれているので、山脈の名前や地名、村の名前や規模が分からない。

もう5分の1ぐらいは進んでいるし、早ければ2日、ゆっくりし

ても3日で村までいけるやろっし、村に着いてから色々聞けばいいやろっ。

そんな事を考えていると、ふと立て掛けた剣に目がいく。改めて考えてみると、剣を一度も振っていない事に気がついた。

剣を手を取ってみる。

考えてみれば、武器として刃物を持ったのはこれが始めてである。そもそも平和な日本では武器を持ったことすらなかった。

一般的な日本人が日常的に使う刃物は、包丁やハサミなどだろう。それでも殺傷能力はあるが、元来殺す事が目的では無い物である。しかし今持っているものは、”殺す”と言う事を目的として作られた物であり、今まで触れる事の無かった物である。

少し緊張するが剣を抜いてみる。

刃渡りは60cmくらいだろうか、刀のように反りは無くストレートの両刃。

刀のように切り裂くのではなく、力に任せて叩き切る事を目的としたものだろう。

それでも刃の部分はよく砥がれており、綺麗に光っている。鉄製であろうその剣を今の筋力なら片手でも使えるだろう。

けれど手に取った剣は不思議な重みを感じる。

「これで何かの……誰かの命を奪う事になるんか……。」  
命を奪うという不安が腕にのしかかる。

自分の命や誰かの命を守るためには仕方が無いと思う。

(・・・だけど・・・)

「俺にできるんやろうか・・・。」

それでも襲われるのなら戦わなければならぬし、生きたいのなら殺すしかない。この世界ではそれが当たり前前の事だろう。

「覚悟を・・・覚悟を決めるしかないか・・・。」

不安を紛らわすように、手に持った剣をしばらく振るうのだった。  
。。。

・・・ガサツ!

突然、後ろの草むらから何かが動く音が聞こえる。

ドクン!

心拍数が跳ね上がる。

振り返り、音のした方を向くとそこには……

ウサギがいた。

「なんやウサギか、脅かすな………つてデカ！  
んで角！！！」

突然現れたウサギのような生物は普通のウサギの3倍はあり、頭に角が生えているのだ。

声に反応したウサギ？はこちらに気が付いたようだ。  
異世界に来て初めて遭遇した動物？は、明らかに敵意をこちらに向けて唸っている。

ウサギ？の方を向き、握っていた剣を正面に構える。

ウサギ？との距離は5メートル程離れている。

(このまま逃げてくれへんかな……)

そんな考えはどうやら甘いようで、ウサギ？は角をこちらに向け突っ込んできた。

図体に似合わずかなり速い。

「おっと！」

右に跳んで避ける。

どうやらスピードではかなりアドバンテージがあるようで軽くかわす事ができた。

勢い余ったウサギ？は岩に激突した。

振り向き、ウサギ？の方に視線を向ける。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ありえへんな。」

激突した岩がウサギの角によって一部が砕けてしまっていた。

（あかん！まともにもらったらすすがにやばい！とにかく避けな  
！）

初めての戦闘で、冷静さを欠き、完全に逃げ腰になってしまっ  
ている。

ウサギ？は振り返り、再度突っ込んでくる

それを避ける

突っ込んでくる

避ける

突っ込む

避ける





「まずは、傷の治療やな。」

剣の血を払い、川で体や服に着いた血を洗い流し、袋の中から2つの小瓶を取り出す。

「って、どつちが回復薬やねん。」

落ち着いてきたのか、いつものアレがどんどん出始めた。

二つの小瓶の蓋を取ると、一方は液体で、一方はジェル状だった。なんとなくジェル状の方が塗り易そうだったので少量手に取り傷に塗ってみる。

すると、徐々に痛みがなくなり、傷がふざがった。

「どつやら当たりみたいやな。」

傷が直り、気持ちも落ち着いたので、村へ向けて出発することにした。

いつまでもここにいるわけにもいかないので、初めての敵に手を合わせ、また歩き始めるのだった。

## 2話 命のやり取り（後書き）

初の戦闘シーンでした。 かなり苦しんで書いてます……。。

ご意見、ご感想、批判、アイデア募集しています。

ちなみに次話は、ヒロインの一人目が登場する予定です。

### 3話 第1異世界人発見？（前書き）

会話むずい。

あと、書き方少し変えています。

4 / 25 修正しました。

### 3話 第1異世界人発見？

初めての戦闘が終わり、再び村に向けて進み出したのだが、ペー  
スがまったく上がらない……。

ウサギ？に何とか勝利したが、また襲われるかもしれないと言  
う恐怖心が足取りを重くしているのだ。

だが、本来は現在のペースが普通なのだ。丘から川までは、まっ  
たく無警戒で進んでいた為、あのハイペースが維持できたのだつた。  
もちろん、能力強化のおかげでもあるのだが、その能力強化によ  
って得られた身体能力に有頂天になり、まったく周りが見えていな  
かった。

異世界に来るまでのありえない出来事の連続に現実感が失われ、  
強化された能力にのまれ、力に酔っていたのだ。

しかし、彼はある意味、運があつたのだ。無防備な状態での移動  
中を襲われていたなら、それほど強い魔物がいないとはいえ、無事  
ではすまなかつたかもしれない。

それに偶然ではあるが、襲われた時に剣を振っていた状態だつた  
事もそうだ。剣から離れた位置に居たり、剣を抜いた状態でなかつ  
たら、突然の遭遇に平和ボケした元日本人では反応できなかつただ  
ろう。

そして、一番の幸運が、初戦において苦戦して勝利した事である。  
これが瞬殺、圧勝となっていたら、彼は、戦闘での恐怖心を覚える  
事なく、慢心したまま進んでいき、その慢心が取り返しのつかない  
ことになっていたかもしれない。

周囲を警戒しながら、彼は進む。

時折聞こえてくる物音にビクつきながらも夕方まで何事も無く進  
み、夜になり辺りが暗くなる前に休むことにした。

質素な夕食を済ませ、寝床を作ることにしたのだが、地面で寝て

いては襲われる可能性が大きいことに気が付く。そこで、周辺を散策して安全に休めそうな場所か、何か使えそうな物を探すことにした。

辺りには身を隠せそうな場所は木の上しか無かったのだが、木に巻きついていて太い蔓を見つけた。

「これは使えそうやな。」

太い蔓をロープの代わりにし、木に登り蔓で体を固定して眠ることにした。

かなり寝にくいだが、初戦闘と警戒しながらの慣れない森の移動で疲れきっていたためにその日はすぐに眠りについた。

2日目の朝は最悪の目覚めだった。体を固定していたために寝返りを打てなかつたので体が痛む。

それでも睡眠がとれたので、体力的にも精神的にもある程度は回復できていた。

「今日は安全に寝れそうな所を早めに見つけんとあかな。」  
朝食をすませて村へ向けて歩き出す。

1時間ほど歩いた所、前方で何かが動いた。  
すぐさま剣を抜き構える。

現れたのは、巨大なネズミだった。体長1メートルはあるだろう。そして醜く太っており、腹を空かしているのか、よだれを垂らしながらこちらを見ている。

「どうやら、俺は餌にみられてるようやな。」

デブネズミは、のそのそとこちらに近づいてくる。

「クソッ！そっちが殺る気なんやったら、殺つたるわ！」

前回と違い、こちらから仕掛けていく。

デブネズミとの間合いを一気に詰める。そして、そのままネズミの左側を走り抜けるように一撃。

「チツ、浅いか！」

まだ戦闘に慣れていない為に目測を見誤り。それほどダメージを与えられなかった。

改めて剣を構える。しかしデブネズミはまだ振り返る途中である。

(いくらなんでも遅すぎるやる・・・)

そうではない、彼が速いのである。

前回の戦闘では動揺が激しく、集中しきれていなかった為にうまく動けていなかった。

だが今回はある程度、集中できているので、能力が発揮され、相手の動きが見れているのだ。

よくプロスポーツ選手や格闘家などが体感する、ボールが止まっ  
て見える、対戦相手の動きがスローモーションに感じる。そんな感  
覚に近いだろうか。能力強化の恩恵によるスピード、それに対応す  
るように強化された動体視力や情報処理能力、それらによって彼に  
も相手の動きがスローに見えているのだ。

(とにかくチャンスや、次はおもつきりいったる！)

間合いを詰め、振り向く相手の反対側に回りこみ、その勢いのま  
ま剣を振り落とす。

グチャリ

肉を切る感触が腕に伝わり、デブネズミの首が転がる。

「フウー、案外あっさりさったな。とろくて助かったわ。」

実際、このネズミの動きはそれほど遅くは無いのだが、戦闘に慣  
れていない彼は、相手が遅いと勘違いしているようだ。

2度目の戦闘の後、昼食まではかなりのエンカウント率だった。

でかい芋虫やゲル状の生き物は、動きが遅いため戦わず逃げ、向  
かってくる猪やデブネズミは返り打ちにして進んでいった。

だいぶ戦闘にも慣れ、動きもよくなってきたのか順調に進み現在  
は3分の1ぐらいの所まできている。

今日は早めに寢床を探す事にし、周辺を散策する。昨日のように

木の上はさすがに避けたい。

しばらく辺りを探していると、木と岩の間に調度よい隙間を見つけたので、辺りが暗くなる前に、夕食を済ませ、入り口を草で隠してその日は早めに眠った。

3日目の朝はましな目覚めだった。

前日と違い、横になって眠れたのは良かったが、下が地面だったので少し体が痛かった。しかし、木の上と違いぐっすり眠れたので、精神的、体力的にもかなり回復していた。

朝食を済まし、今日も村を目指して進みだした。

前日とは打って変わり、魔物にまったく会わない。昼食を終えた段階で半分を越え、3分の2近くまで進んでいた。順調で怖いくらいだ。

「このまま、村まで何もなかつらえんやけどな……。」  
そんなフラグを立てつつ進んでいると、きつちり回収かのするよ  
うに。

「うああああ……！」

と、男の叫び声が聞こえてきたのだった。

とりあえず、状況を確認するために叫び声の方に走る。

たどり着いた先で目にしたのは、無数の大きな蜂の死骸と横たわる男性、木を背にし蜂に囲まれた獣人だった。初めて見る獣人に驚いたが、まずは状況を確認する。

獣人は左腕に怪我をしているようで、右腕一本でバスターソードを構えている。

（とりあえず生きてるか死んでるかわからん方は後回し、まずは

確実に生きてる方からや。)

剣を抜き一気に間合いを詰めると、まだこちらに気が付いていない蜂に切りかかる。

無防備な背後から一撃、切り返して違う蜂の胴を薙ぐ。さらに獣人駆け寄りながらすれ違い様に一撃、そのまま獣人と蜂の間に立ち、剣を構える。近くで見ると獣人は女のように、腕の傷は噛まれたような傷と蜂の針が刺さっていた。

突然の襲撃者に警戒した蜂たちは距離を取る。

「おい！大丈夫か！」

「はあはあ、な、なんとかね。それよりあんたは……………」

「その後や、まずこいつらを片付けるわ！」

「片付けるって、この数を一人じゃ無……………」

獣人の言葉が終わる前に駆け出す。

残る蜂は6匹。

(剣一本じゃ手数が足りん。)

ショートソードを右手に持ち、左手でナイフを抜き逆手に持つ。

近くにいる2匹の蜂の右側の方に剣で斬り付け、その勢いのまま左手のナイフを上方から遠心力を付け左側の蜂の頭に突き刺す。

一瞬で2匹を片付け、反応できていない蜂達を尻目にさらに違う2匹に斬りかかる。

1匹目を右下段から斬り上げ、体を回転させ頭にナイフを突き刺す。さらに踏み込み、もう一匹を上段から切りつける。

(これでラスト2匹や！)

ここでやっと反応した2匹が向かって来る。2匹は連携するように1匹が前方から、もう一方が回り込むように突っ込んでくる。

(同時に攻撃されたら防がれへん！)

手に持っていたナイフを前方の1匹に投げつける。もちろん、素人が投げたナイフが刺さる事はなかったが、動きを止めるには十分だ

った。回り込んで来た蜂を蹴り飛ばし、動きを止めた蜂を斬る。蹴り飛ばされた蜂は羽をやられたようでのた打ち回っている。

ナイフを拾いのた打ち回る蜂の側による。

「これで終わりや。」

ザシユツ

最後の1匹を仕留め、倒れている男に向かうが男は喉を噛み切られており、すでに息をしていなかった。

男は諦め、獣人の方に向かう。獣人は緊張の糸が切れたのか座り込んでしまっていた。

「あいつは？」

首を横に振る。

「そうかい・・・助けてくれてありがとうよ。あんたが来てくれなかったらあたいもあなつてたよ。」

「すまないな、もう少し早く来れば助けられたかもしれんのに・・・」

「しょうがないさ、あいつに運が無かったただけだよ。」

「ずいぶんあっさりしているんやな。仲間じゃなかったんか？」

「たまたま依頼で一緒になっただけで、昔なじみって訳でも無いしね。それにあたいの運もここまでのようだからね。」

「どういうことや？」

「こいつのせいさ。」

獣人はそういつて左腕を見せる。

「傷はたいした事ないけど、この蜂の針には毒があつてね、解毒できなければこのままお陀仏なのさ・・・」

「ならあんたにはまだ運があるようやな。ちよつと待つときや。」

袋を取りに行き、中から小瓶を取り出し、針を抜いて液体を少しかける。そしてジェル状の方を傷口と針の後に塗る。傷は塞がって

いくが、毒が消えたか自信がない。

「これで大丈夫やと思うけど、一応解毒薬を飲んどいたほうがいいな。」

「本当にありがとな、あんたは本当に命の恩人だよ。」

「いいよ、俺じゃなく神に感謝してくれ。」

(神がくれた物やしな。)

「あんた、神を信じているのかい？」

「いや。無神論者やってんけどな。」

「……？。まあ、いいわ、自己紹介がまだだったね。あたいはヨーコ。ギルド所属の冒険者だよ。」

「俺は犬飼いぬかい 罫るい。ルイが名前でイヌカイが家名やな。友人からはカイルって呼ばれてる。ヨーコもカイルって呼んでくれていいで。」

「わかった。よろしく、カイル。家名があるって事は貴族かなんかかい？そうは見えないんだけどね……。」

「いや、一般人やで。俺の住んでた所では、家名があるのが一般的やってん。」

「そつか。じゃあ、やっぱり冒険者なのかい？」

「いや、こちらに来て間もないから今んとこ無職になるかな。村で職を探すつもりやねん。」

「あんなに実力があって無職って……。あんたよく判らない奴だね。」

「まあ、とにかく、そろそろ移動するか。どこか休めるは所ないか？」

「それだったら、ここから1時間くらい行った所に、冒険者や狩人が使う小屋があるよ。そこだったら、柵もあるし、魔物が嫌う草も植えてあるからゆっくりと休めるよ。」

「じゃあ、後の話は小屋でやな。とにかく移動や。立てるか？」  
手を差し伸べ、引き起こすが、ヨーコは立ってるのがやっとの様子だった。

「しょうがないな、ほらっ、背負ってやるから。」

カイルは背中を向ける。

「えっ！ちよつと待ち、あ、あたい重いしさ、なんとか、歩けるから！」

ヨーコは恥ずかしいのか、赤面し、かなり動揺している。意外にウブなようだ。

「そんなふらふらで何言つてんねん。また襲われたらどないすんねん。」

「うー、でも……しょうがないか……。お、お邪魔します。」

「はいはい、どうぞ。」

しぶしぶ背負われるヨーコ。

「うっ！」

「どうしたんだい！や、やっぱり重いんだろ！」

前かがみになるカイル。

「いや、なんでもない、行くで。」

(やばい、ヨーコ胸でかすぎやろ)

背中にあたる感触に前かがみになりながら進む情けないカイルであつた。

### 3話 第1異世界人発見？（後書き）

今回まとめきれず長々と書いてしまいました。

ヨーコの口調が微妙に安定してません・・・。

なにかアドバイスありましたらよろしくです。

誤字、脱字、ご意見、ご感想、批判、お待ちしています。

変更でヨーコの言葉使いを統一しています。

#### 4話 小屋に着きました(前書き)

足りない部分は脳内補完でお願いします。

4 / 2 5 修正しました。

ご指摘いただいた内容を少し追加修正しました。

#### 4話 小屋に着きました

ヨーコは移動中は背負われて恥ずかしいのかほとんど話さなかったが、ムフフなイベントをなんとかこなして、現在は小屋の前にいる。

小屋はちょっとした砦のようで、周りを高い柵で囲まれていて、その外周に魔物除けの草を植えてある。草は多年草らしく、この地域の温暖な気候も相まって枯れることは無いらしい。柵の中は小屋を中心に、西側に倉庫、東側に井戸があり、北と南は練磨場のようになっている。練磨場といっても案山子と的があるだけだが。

「結構、立派なんやな。」

「だろ。村とギルドが協力して作ったらしいからね。とにかく中に入るうや。」

「せやな。やっとゆっくりできるわ。」

小屋は平屋造りでログハウスっぽくなっている。中は7〜8人ぐらいは泊まれるような広い造りになっている。LDK?になるのか、大部屋で入り口から見て左側にベットが6つあり、中央に丸机と椅子が3セット、右側に調理場のような物と長机がある。

「体は大丈夫か？」

「まだ、ちよいダルいけど、大丈夫だよ。」

「せやったら、いくつか質問させてな。まず、何があったか聞かせてくれるか。」

ヨーコから聞いた話によればこうだ。ギルドで同じ依頼を請け負った5人で森に入った。依頼はキラビーというあの蜂の討伐で、村の近くで被害が増えたため、討伐の依頼がギルドに入ったらしい。キラビーは本来10〜15匹の働き蜂と1匹の女王蜂なのだが、

彼らが遭遇したのは50匹を超えるキラビーとありえない大きさの女王蜂だったらしい。本来の依頼はCランクで（カイルにはCがどの程度か分からないが）それほど難しくない依頼らしいが、本来の5倍以上（Aランクぐらいだろうとの事）では圧倒的だったらしい。初めの戦闘で3人がやられ、任務継続は不可能になり、なんとか逃げたが、後を追ってきた数匹に迫り着かれてしまい、不意打ちに近い形で男が殺され、何匹かは倒したが、ヨーコも手傷を負ってしまった。そこへカイルが現れたそうだ。

「あんたが来てくれてなかったら、あたかも終わってたよ、改めて礼を言う、ありがとよ。」

「まあ、たまたまだったからな、ヨーコの運が良かったんや。」

「まあ、そーいう事にしとくよ。それはそうと、カイルはどこから来たんだい？それになんでまたあんな所に？」

（痛い所を付いてくるな、さて、どない説明しようか・・・）

とりあえず、それっぽい理由として、じじいと山奥の村で住んでいて、じじいが死んだのを機に旅に出た。荷物が少ないのは、魔物との戦いの時になくした事にした。常識が無いのは山奥の村出身だからなど、それっぽい事でごまかした。

「そうなのかい。じゃあ・・・」

ぐううー……………

おもつきりヨーコの腹がなり、赤面しながら言い訳する。

「こ、これは、逃げるので必死で、荷物をなくしたから何も食べなくてそれで・・・。」

「いいからいいから、とりあえず飯にするか。たいした物は無いんや……………」

（いまさらやけど、ヨーコって猫っぽいよな。たぶん肉で大丈夫やろうけど。）

「なあ、ヨーコ。ヨーコってなんて種族なんや？」

「ん？見て分からない？赤虎族だよ。結構多いんだけどなあ。」

（赤虎ってことは、赤い虎やな。たしかに赤髪に虎柄やし尻尾も猫系のやつやし。でも顔は人間に近いな、何より巨乳で美人で巨乳！）

カイルはオツパイ星人なのかそんな事を考え、改めてジロジロ見ていると。

「急にそんなに見られたら恥ずかしいだろうが！」

胸を隠すようにして言うから余計に巨乳が強調される。

「すまんすまん。獣人と会った初めてのやねん。住んでた所はヒト種ばかりやったから。」

「まあ、山奥や言うてたからな。しょうがないなあ。」

（セーフ。山奥設定あたりやな。）

「と、とにかく、飯にしか。干し肉とクラッカーしか無いけどな。」

「充分だよ。それより量は大丈夫なのかい？村まで後1日くらいで着くけど……。」

「心配せんでも大丈夫や。何かあった時ように残してたから、2人でも村までやったら余裕であるわ。」

いつかのフラグを回収しつつ、食事をしながら色々な事を話す。

この世界いる種族は、人間、エルフ、ダークエルフ、ドワーフ、猫系獣人（赤虎族、黒虎族、白虎族、キヤッティアなど）、犬系獣人（黒狼族、白狼族、ドックスなど）、熊系獣人、龍人族（数は少ないらしい）魔族（人と同じように良い奴も悪い奴もいるらしい。）、その他などがいるらしい。（かなり混血が多いらしい。ヨーコも混血だそうだ。）

大陸には大きな国が5つあり、現在いるのが自由都市国家フリークス（大統領制で民主国家）で東南に位置する。中央部北から北東にかけては、最大の国家であるロンゴール帝国がある。中央部にラストニア皇国、西南には部族集合国家フォレスティア（エルフや獣人などが多い。）がある。北西にはガルア王国があつたが、数十年前に現れた魔王に滅ぼされ、現在は魔国になっている。今は魔国に面した帝国、皇国、集合国が連携して対応しているため均衡状態が続いている。

魔王は数百年単位で現れるらしく、様々なタイプがいるらしい。過去の文献によれば人型だったり、龍だったり、魔物や化物だったりする。攻め方も国を侵略したり、破壊の限りを尽くしたり、疫病を蔓延させたり色々だったらしい。（現在は侵略方になるのか？）勇者は魔王を討伐した人物に与えられる称号で、自称勇者などはかなり痛い人が多いらしい。

食事が終わり、のんびりしていると。

「カイルはこれからどうするんだい？」

「どうするって寝るけど？」

「じゃなくて、村に着いた後の事だよ！仕事を探すって言うてたけどアテはあるのかい？」

「あー、まったくないわ・・・」

「あんたねえ、いきなり部外者が行つて出来る仕事なんてなかなかないんだよ。」

「まじでか・・・どないしようか・・・」

「まったく・・・。それだったら、ギルドに登録して冒険者はどうだい？結構稼げるし、元でほぼゼロで出来る仕事だしね。」

「んーん、まあ、それしか無いなあ。」

「なんか心配だねえ。しょーがない！カイルは命の恩人だし、慣

れるまであたいが面倒みてやるよ。」

「ヨ、ヨーコが女神に見える。姉さん！一生着いてきます！」

ヨーコは女神にテレながらも

「たたく調子がいいね。それにあたいは21だよ！ま、あんたから見ればかなり年上か。」

「ん？俺もう20やけど？」

「本当かい！？まだ16ぐらいだと思ってたよ……。」

「……………」

「……………」

「と、とにかく、村に着いたらギルドに行つて、カイルの登録とあたいの依頼の報告だね。」

「依頼つて失敗したんだよな。違約金とかあるんか？それに荷物失くしたんやる？金は大丈夫なんか？」

「場合が場合だからね。今回は違約金はないよ。どちらかと言えばギルドの情報不足の為の失敗だし。お金はギルドに預けてあるから、この指輪さえあれば大丈夫さ。」

そういつて指輪を見せてくれる。指輪には身分証明や個人情報が入っているらしい。

「じゃあ、安心だな。」

「とにかく今日はもう休もうか、さすがに疲れたよ。ギルドの詳細い説明は村についてから話すよ。」

「了解。ほな寝るか。お休みヨーコ。」

「お休みカイル。」

久しぶりのベットと溜まった疲れからか、2人はすぐに眠りについていた。

そして翌朝、2人は村へ向かうのだが、先に起きて水浴びしているヨーコと鉢合わせてしまい、メロン2つを直視した後に、軽くぶつ飛ばされるドキドキイベントが発生した。この時のカイルはとて

も幸せそうな顔でノビていたそうだ。

#### 4話 小屋に着きました(後書き)

今回やっとヨークの種族を説明できました。  
次回はギルド登録します。

誤字、脱字、ご意見、ご感想、批判、指摘、  
などなどお待ちしております。  
ます。

5話 村々に着いたよつだ(前書き)

予定の通りに進まないー

## 5話 村？に着いたようだ

現在、村の入り口まで来ている。

小屋から村までは、ある程度、道として整備されていて比較的  
歩き安くなっていた。

途中、戦闘もあつたが、例のデブネズミ（ビククラットが正式名  
称らしい）が2匹出ただけだった。

1匹はカイルが、1匹はヨーコが対処したのだが……。

ヨーコの力が半端で無かった。

カイルが突っ込み1匹を仕留め、ヨーコに加勢しに行こうと振り  
向いたら……。

見事に4番がホームランしていた。

ただしボールは二つあつたが……。

ヨーコがバスターソードを横薙ぎに振るっ

剣がビククラットを捕らえる

ジャストミートし、上下がさよならする

上が右回転

下が左回転

綺麗な弾道を描く

これは大きい！入るか入るか！？

入った！場外ホームラン！！！！

.....

そんな、子供がみたらトラウマ間違いなし！のB級ホラーのスパッタな光景を目にしカイルは、ヨーコのドキドキイベントはなるべく控えようと心に決めるのだった。

（だって命がいくらあっても足りないんだもん！）

そんなこんなで村の正門の前だが、村は「もうすでに街やる！」といったものアレな感じが出てしまうくらい立派だった。

外周は城壁のようになっており、ぐるりと村を囲んでいる。

入り口には鎧を着た兵士が立っている。

兵士は不審者の監視も一応やっているらしいが、どちらかといえは魔物対策の意味合いが強いらしい。

入り口で職質かけられるかとカイルはドキドキしていたが、特にイベントもなく普通に中に入った。

村はメインストリートが村を半分に分けており、入り口から見て、左側が住宅街、中央メインストリート沿いに商店が並び、右側に宿屋街、飲食街、ギルド、軍施設などがある。

村はここ20年で急速に発展したらしく、比較的新しい建物が多い。

何でも、現在の村長が村に近い山間で鉱脈を発見したらしく、それまでは農業や林業が主な産業だった貧しい村が、鉱脈の発見で爆発的に発展していったそうだ。

村が発展し、人が集まれば犯罪や問題が増える。その為、軍施設が鉱脈や村の警備、村の治安維持のために、ギルドの支部はそれの補助やその他の問題解決のために設立されたそうだ。

ここまで発展した現在も村となっているのは、村長が「街長とか都市長とかめんどい！村長ですらみんなが言うからやってるのに！気楽でいたい！税は払ってるんだから文句は無いだろう！後任が引き継ぐ時に街でも都市にでもしろ！」と言っているからだそうだ。

なんとも自由人だが、能力があり、住民も慕っているために国も文句が言えないそうだ。

まあ、国の方も「ぶっちゃけ、どっちでもいいんだけどね！税はかなり貰えてるし。」ぐらいな感じらしく、いかにも自由都市国家と名前の通りな感じの国である。

「今日はもうすぐ暗くなるし、あたいの報告と預金を下ろしにギルドに行つて、村を軽く案内した後にあたいの定宿に行くつて具合でどうだい？」

「ヨーコに任せるわ。村の事わからんし。」

「任されたよ。それとギルドの登録には時間が掛かるから、登録は明日になるよ。」

「あいよー、とにかく行こうや。久しぶりに暖かい飯を食いたいし。」

「ったく、あなたは・・・、まあいいよ。じゃあ着いて来な。」

そして2人はメインストリートを歩きだした。

メインストリートは商店だけでは無く、屋台や立ち飲み屋みたいな所もありこの時間でもかなり賑わっている。

カイルは初めて見る異世界の町並みや商品、ヨーコ以外の獣人、エルフ、ドワーフ、巨乳な獣人、巨乳なエルフ、巨乳なドワーフ、などなどに目移りしながらキョロキョロして、まんまおのぼりさんだった。

「山奥育ちだからしょうがないね。」

とヨーコにも巨乳を見ていたのがばれず。

( やっぱ山奥設定あたりやな )

などと考えているうちにギルドに到着した。

ギルドは二階建てで立派で、後ろにコロシラム的なものが見える。中に入るとロビーがあり、かなり広い。入り口から見て左側に依頼を張つてある掲示板、中央にテーブルと椅子が数セット、右側に2階に繋がる階段、奥に受付がある。

雰囲気もよくイメージする殺伐とした感じでは無く、職員も制服なので市役所のような感じだ。

まあ、冒険者が殺伐としているので、慣れないとかなりミスマツチだが……。

「じゃあ、あたいは報告に行くからちよつと待ってな。」

「あいよー。」

ヨーコは知り合いらしい何人かに挨拶をしながら受付に向かった。カイルは突つ立て居てもしょうがないので、依頼の掲示板を見てみることにした。

依頼は多種多様で、家事手伝いみたいな事やアルバイトのような事、収集系、討伐系などがあつた。

「冒険者と言うより何でも屋みたいやな。」とアレな感じな所にヨーコが帰つて来た。

「何、ブツブツ言ってるんだい？つてそれよりも、もう少し待つてくれるかい。ギルド長に直接報告に行くことになつちまってねえ。」

「そうなんやあ、じゃあ適当に座つて待つてるわ。」

「悪いね。すぐに終わらすからよ。」

そう言つてヨーコは二階に上がつていった。

カイルはもうしばらく掲示板を見た後に中央のテーブルの1つに腰掛けた。

する事が無いのでひたすらぼーっと人間観察していたら、「てめ

え、見ない顔だな。」だとか「ここは餓鬼が来る所じゃないぞ！」など、まさにテンプレ冒険者Aな男に絡まれた。

(メンドイな、とりあえず無視決め込むか、そのうちどっか行くやる。)

しかし、そんな態度がお気に召さないのか、「てめえ！無視してんじゃねえ！ぶっ飛ばすぞ！」とテンプレ的に胸倉を捕まれたもんだから、さすがにカチンときてしまい。無言のまま彼のジュニアを蹴りあげた。

かなり鈍い音がし、男は膝を着いて悶絶している。

まだ怒りが収まらないので、男を蹴り倒し、逆エビを決めながら、「てめえこそ誰やねん！こっちは慣れへん旅で疲れとんねん！めんどくさい絡み方しとんちゃうぞボケが！このまま背骨いわしたるか！おい！聞いとんのか！」

と周りも若干引いている中で巻くし立てていると、

「カイル、何があつたか大体想像着くけど、それくらいにしときな、完全に失神してるよそいつ。」

見ると男は泡噴いて失神していた。

「 shouldn't, 今日はいくらにしたいわ。」

「そうそう、こんな馬鹿、相手にするだけ損だよ。」

「ん？こいつ知ってんのかあ？」

「まあ、ちよつとね……」

どうやらこの男は、ヨーコをパーティーに誘ったり、口説いたりとしつこく着きまとい、何度かぶつ飛ばされているようだ。

そんな愛しのヨーコが知らない男と入って来たのを見掛け、ヨーコがいなくなったのを見計らって、焼きを入れに来たようだ。まあ、相手が悪かったようで、カイルに返り打ちにされたのだが。

ヨーコは美貌もそうだが、実力も上位ランクなようでパーティーへのお誘いが結構あるそうだ。

しかし本人は気楽な方がいらしく、現在も1匹狼(ヨーコの場合

合は一匹虎か?)らしいのだ。

「とにかく、用事は済んだし、気を取り直して飯でも行こうよ、  
今晚はあたいが奢るからさ。」

「姉さんあざっす! やっぱり姉さんは女神ツス!」

「馬鹿、こんな所で何言ってるんだい! もう、とつとと行くよ!」

ヨーコはテレまくりで外に出る。カイルが後に続く。その後を伸びている男が職員さんに放り出され、地面にキスをする。何とも惨めな男だった。

そんなこんなで思ったより時間が掛かったようで、辺りは暗くなっていた。

ギルドを出た二人は、村の案内は明日にして、ヨーコの定宿で夕食を食べる事にした。

ヨーコの定宿は『憩いの宿、森の日だまり』という名前の宿で、女性冒険者に人気の宿らしい。

1階が食堂と受付などで、2、3階が部屋になっているようだ。

「ただいまマリアさん」

「ヨーコかい、お帰り。依頼はどうだった?」

「それは後で話すよ。それより夕食を2人分用意して貰えるかい?」

「アラ、お連れがいるなんて珍しいねえ。しかも男かい!? ちよつと幼い気もするけど、ヨーコにも春が来たんだねえ。」

「ちよつ、何言ってるんだよ! カ、カイルは、そ、そんなんじゃ無いよ! それにカイルは20歳だよ。確かに童顔だけど……かっ……。」

最後の方は聞き取れなかったが、現在蚊帳の外真っ最中である。

マリアさんは本名はマリアンヌと言っらしく、何とも可愛らしい

名前だが、熊系獣人なのでかなり敵つい。

マリアさんは元冒険者らしく、結婚を機に引退し宿を始めたらしい。旦那さんも元冒険者で宿の料理長をしている。

「まあ、ヨーコもそっちの子も座りな。今、用意してもらおうからさ。」

「ありがとうございます。挨拶がまだでしたね。私はカイルです。若輩ものですがよろしくお願いします。」

「これはご丁寧にも、私はマリアンヌ、マリアって呼んでくれていいよ。」

「はい、マリアさん。久しぶりの暖かいご飯なので、楽しみです。」

「そうかい、じゃあサービスするように言っておくよ。とにかく座りな。」

「はい。では失礼します。」

そんなやり取りに、ヨーコは啞然としていた。

「カイル、あんた言葉遣いが……。」

「これですか。何故か緊張したり丁寧に話そうするところになってしまっんですよ。」

「あんたって、本当に……、まあいいよ。とにかく飯だね。」

「そうやな、かなり腹減ったわあ。」

「……………」

しばらく待っているとマリアさんとコック姿の人が料理を運んできた。

どうやら、旦那さんのようだが、これがまたものすごいイケメンだった。これぞ美女と野獣！（逆だけど）って感じた。

何でも、同じ依頼を受けた時に、旦那さんがマリアさんに危ない所を助けられ、旦那さんがマリアさんに惚れてしまって、猛烈なアタックにマリアさんが負けて結婚したようだ。

そんな二人の馴れ初めを聞いたり、ヨーコの依頼の話をしたり、楽しく食事をした。料理も元冒険者らしいポリウムのある（かなりサービスしてくれたようだ。）味も抜群の料理だった。

「それで、カイルは宿は決まっているの？」

「食事を終え、食器を下げに来たマリアさんに尋ねられた。

「あつ！考えてなかったよ。」

「私も全く考えていませんでした。」

「つたくあなた達ねえ。ちょうどヨーコの部屋の隣が空いてるけど、どうする？」

「では是非、泊まらして貰います。」

「それじゃあ、1泊2食付きで銀貨5枚になるよ。」

（日本円だと大体5000円か、こっちの物価安いな。）

「ヨーコは、どれくらい払ってるんですか？」

「あたいは、後10日前払してるよ。」

「では、私も10日分をお願いします。」

そう言っって金貨5枚を払い、食堂を後にした。

マリアさんに案内されたのは206号室で一番奥の部屋だった。

ヨーコは隣の205号室だ。

部屋は綺麗に掃除しており、内装もオシャレな感じだ。

（部屋も綺麗でオシャレ、料理は美味しく旦那さんは男前、マリアさんも優しく面倒見がよさそうだし、女性に人気なんも頷けるな。）

「今日はなんだかんだで疲れたし、宿には風呂もあるみたいやし、風呂に入って寝るか！」

と、いつものアレを全開で風呂に向かった。

もちろん、先にヨーコが入っているのに、マリアさんの悪戯でプ

ツキングして、ヨーコ揺れる双子山を見ながらぶっ飛ばされるイベントを消化した後に、風呂に入ってから眠るのであった。

（マリアさんグツグツジョブっす。）

## 5話 村？に着いたようだ（後書き）

前話の後書きでギルド登録するって言うてましたが、村の話が長くなってしまい、切りがいい所で終わると、ギルド登録できませんでした。

次話でギルド登録します。

それと、何気に日ランでランクインしてる事や、総合ポイントが100を越えた事に驚いています。

お気に入り登録してくださった方や評価していただいた方、本当にありがとうございます。

頑張って書いていくので、今後ともよろしくです。

誤字、脱字、ご意見、ご感想、批判、お待ちしています。

## 6話 職業シーフになりました(前書き)

設定ってむずい！

## 6話 職業シーフになりました

「このバカイルが！！！」

「アザっ！…す…」

ガクッ

何があつたか説明しましょう。

朝早くに起きてしまったバカイルことカイルが、

「腹減つたし、ヨーコ起こして朝食食いに行くか！」

とテンション高めに、ノックもせずにヨーコの部屋の扉を、『オープンザドア』したもんだから、着替えていたヨーコの2トップを拝見してしまい、綺麗な右ストレートを頂いてしまったのだ。

何故に右ストレートか、それは左手で2トップを隠していたからである。

カイル曰く、「隠している方が逆にエロい！隠れきれないし。」との事だ。

そんなこんなで、2人は朝食を食べ、カイルの登録の為にギルドに向かうのだった。

「いらっしやいませ。本日はどのようなご用件ですか？」

「今日はこのバカの登録にきたんだよ。」

どうやらヨーコは昨晚、今朝と立て続けのパイ露出にご立腹のようだ。

「ただいまご紹介に預かりました、バカイルです。登録お願いします…。」

「はい。では、こちらの方に記入をお願いします。」

「本当にバカだね…。」

そんな冷たい反応のヨーコに寂しくなりながら、必要事項を記入していく。

項目は、名前、性別、種族、得意武器、特技、魔法の有無などがある。記入は最悪、名前、性別、種族だけでもよいようだ。

（名前、性別、種族はいいとして、得意武器は剣とナイフか？まあそれしか使った事ないしな。特技は…料理？って、特技らしいものは無いな…。魔法は使えないしな…。ん？そういえばヨークは魔法使えるのか？）

「なあ、ヨークは魔法使えるか？」

「……………」

（まだ、怒ってるな。こうなれば！）

「美しく可憐なヨーク姫よ、どうか私めにその清らかなるお声を聞かせてはくれませんか？そうすれ」

「あー！もう！分かったから！そんなこっぴどかしい事を言うんじゃないよ！」

「で、魔法は使えるん？」

「…なんか、怒るのも馬鹿らしくなってきたね…。魔法は多少は使えるけど、得意ではないね。戦闘に使えるようなものは無いよ。」

「使えるや！後で見せてや！」

「魔法なんて、そんな珍しいものでもないだろ。」

「俺が住んでた所では、誰も使えんかってん。」

「そうなのかい？珍しいねえ。じゃ、後で見せてやるよ。あたいの魔法じゃ、火種くらいしか出せないけどね。」

「やったあ！姉さん、あーざッス。」

「つたく、本当に調子がいいね。それに、訓練さえすれば、あんたも使えるようになるんだよ。」

「なんですと！」

（そういえばそうやった。ここに着くまで色んな事があって、すっかり忘れてたわ。）

「詳しい事は、ギルドの講習でも受ければいいよ。」

「ギルドって講習もやってんの？」

「ああ、魔法以外にも色々あるよ。初心者用にね。」

「そうなんや。なかなか手厚いな。」

「ギルドとしても、初心者にバンバン死なれたら、稼ぎにならないからね。」

「どこの世も世知が無いねえ。」

「とにかく、書けたなら早いとこ出いなよ。」

「あいよー。では受付のお嬢さん、お願いします。」

「はい、承ります。お名前はカイルさんで間違いないですよね。どうぞやら、受付のお嬢さんはバカイルだと本気で思っていたようだ。」

「すみません、カイルで合ってます。」

「では、能力測定と適正検査がありますので、まず、2階の診断室へ行ってください。」

「ヨーコさん、そんながあるの聞いてないんやけど。」

「そうだったかい？まあ、測定はすぐに終わるし、適正検査は、診断の結果や本人の希望職で変わるからね。そんなにたいした事はないよ。」

「そうなんか、まっ、とにかく行ってみますか。」

「じゃあ、あたいはロビーで待ってるから。」

「了解、行ってくるわ。受付のお嬢さん、色々ありがとうございました。」

「はい、頑張ってくださいね。」

カイルは測定を受けるべく2階に上がった。

2階の一番手前の部屋が測定室になっているようだ。

コンコン

「失礼します。能力測定を受けに来ました。」

「どうぞ。」

中に入ると魔法陣と測定器のようなものがあった。

「では、お名前をお願いします。」

「カイルです。よろしくお願いします。」

「カイルさんですね。ではそちらの魔法陣の上に立ってください。」  
カイルは言われがままに魔法陣の上に立つ。

「それでは、開始します。」  
職員さんがそう言うのと魔法陣が光出し10秒ほど光った後に光はすぐに消えた。

「はい、終わりましたよ。」

「えっ？もう終わりですか？」

「はい。測定結果はすぐに出ますのでしばらくお待ちください。」  
5分ほど待つと職員さんが紙を持って来た。

「こちらが結果になります。健康状態は問題なしです。能力の説明をさせていただきます。」

説明によれば、パワー、スピード、スタミナ、マジック、メンタルなどの項目があり、数値で表されている。

0～9までがI、10～19までがH、のように0～100までをI、H、G、F、E、D、C、B、A、Sで分けてあり、100以上が と表示されるらしく、 を持つ人の事を「星持ち」や「スターズ」などと呼ぶらしい。

一般的な人の平均がHGくらいで、ギルドに初めて登録する人はこれくらいらしい。

ギルドにはクラスがあり、ソード、セカンド、ファースト、スターと別れているようだ。

そして、平均FEがソードクラス、平均DCがセカンドクラス、平均Bがファーストクラスになるようだ。

スタークラスはSクラスとも言われ、実力的には超化け物らしく、世界で数十人しかいないらしい。

スタークラスは別だが、他のクラスは平均的にそれくらいの数値の人が多くだけで、初心者やソードで化け物みたいな人もいるし、化け物だけど万年ソードみたいな人もいるらしい。

要は、能力はあくまで基礎基準であり、習得している能力や経験、知識、などなどによって個人能力は決まる。

例えば、同じ能力の2人が戦っても、実戦経験のある方や、剣術魔法などを習得してる方が勝つのと、だいたい同じである。

ただ能力が高いだけでは上には上がれないのだ。まあ、低いよりは高いに越したことはないのだが…。

能力は、魔物を倒すだけではなく、経験や鍛える事によっても上がるらしい。

後、書かれているのは、得意属性だ。

これも、あくまで得意と言っただけで、他の属性が使えない訳では無いらしい。これ系の魔法を習得すると早いですよーって感じだそ  
うだ。

ちなみにカイルの能力は、

パワー	4	1	F
スピード	9	1	S
スタミナ	5	3	D
マジック	7	0	B
メンタル	2	8	H
得意属性	風		

となっている。

能力的には、セカンド並って所だが…。

(ド素人やしな俺…。それに確かに精神力は人並みやな。)

ちなみに能力測定機は簡易版がロビーにもあるみたいだ。簡易なので数字は出ないようだが。

「では、測定は以上なので、そちらの紙を持って、受付に向かってください。」

「了解しました。ありがとうございます。」

カイルがロビーに向かうと、ヨーコが暇そうに待っていた。

「終わったのかい？どんな感じだい？」

「あんま、よくわからんけど、こんな感じ。」

「結構すごいじゃないか！でもメンタルは人並みなんだね…」

「そうやな、自覚もあるし。ちなみにヨーコはどんな感じなんや？」

「あたいかい？そういえば、最近見てないね。ちょっと測ってみるよ。」

そういつてヨーコが測った結果がこれである。

パワー	
スピード	C
スタミナ	B
マジック	H
メンタル	C
得意属性	火

「ヨーコ、星持ちやねんな…。」

「まあ、一応ね、でもギルドランクはセカンドだし、魔法は駄目だしね。」

「いやいや、パワー で十分すごいって…。」

（よく生きてたな、俺…）

「まあ、とにかく受付に行ってきたよ。」

「おう、行ってくるわ。」

カイルが受付に紙を渡すと、

「お預かりします。では希望職はどうなさいますか？」

「希望職？ってなんですか？」

「自分の役割を決めるもので、戦士、シーフ、魔法使い、弓使い、回復士など色々あります。後で変更も出来ますので。」

「ヨーコは何になってるんや？」

(絶対戦士だろっけど。)

「あたいは戦士だよ。」

「やっぱり。」

「おい、やっぱりってなんだい。」

「調子こいてすんません。ちなみに俺は何がいいと思う？」

「つたく、そうだね。あんたの得物はショートソードだろ？スピードもあるし、魔法も使えそうだから、攪乱にむいたシーフがいいんじゃないかい？」

「じゃあそれで。」

「本当にあんたはいつも適当だねえ…。」

「じゃあ、受付のお嬢さん。シーフをお願いします。」

「シーフですね。ではシーフで登録させていただきます。」

「おねがいます。」

「では、適正検査は昼からになりますので、後で受付にお越しください。」

「了解です。」

「じゃあ、昼飯でも食いに行くかい？」

「そうやな、昼から検査もあるし、英気を養いにいきますか！」

こうして2人は昼飯を食べに行き、ヨーコに魔法を見せてもらったりして適正検査まで過すのだが、後に、この昼飯が悲劇を生む事を2人はまだ知らなかったのだ…。

## 6話 職業シーフになりました（後書き）

今回かなり迷いました。

色々ご意見があると思いますが、やさしめをお願いします。

後、ポイントがすごい事になってますね。

読んで頂いている方、本当にありがとうございます。

誤字、脱字、ご意見、ご感想、批判など、お待ちしております。

7話 適正検査のようだ(前書き)

戦闘シーン、久しぶりに登場です。

## 7話 適正検査のようだ

昼飯も食べ終わり、ヨーコの指から火を出す（カイルは指ライタ  
ーと命名）を披露してもらったあと、ギルドに戻った。

受付に行くと白虎族と思われる男が立っていた。

男はヨーコとは違い、かなり獣よりの顔をしている。

「お前がカイルか？」

「そうやけど、おっさん誰や？」

高圧的なので、カチンときて、ついつい地で答えてしまう。

「カイル、この人は…」

「俺は、お前の適正検査の担当になったバルスだ。」

ヨーコの言葉を遮るようにバルスが答える。

「で、適正検査ってなににするんや？」

「それは移動してから伝えるから着いて来い！」

そう言つて、男は階段の下にある扉から出て行った。

「じゃあ、ちょっと行つてくるわ。」

「あたいも行くよ、あんたがどんな事するか気になるしね。」

そして、2人はバルスの後を追った。

着いた所はギルドの後ろにあるコロシウムだった。

コロシウムはサッカーグラウンドほどの広さがあり、壁にはかな  
りの傷がある。

「あたいはここで見てるからさ。」

ヨーコは入り口付近の壁にもたれ掛かるっている。

バルスは手に木刀を持ち、木製の武器が置かれた棚の前に立つて  
いた。

「この中から得物を選べ。」

カイルは、ショートソード型の物を手に持ち、ナイフ型の物を腰

に挿した。

「選んだで。」

「では、質問に答える。今までの戦闘歴は？」

「角が生えた兎、ビッグラット、キラービーだけや。」

「ほう、アタックラビットを倒したのか。剣を握ってどのくらいだ？」

「約1週間」

「つまり、ド素人でアタックラビットを倒した訳か。なかなか面白いやつだな。」

「うさぎ？はアタックラビットと言っらしく、それなりに強い魔物だったようだ。」

「では、中央へ移動するぞ。」

2人は中央で向き合う形で立つ。

「適正検査は簡単だ。俺に一撃でも入れれば合格だ。」

「一撃と言わず、フルボッコにしたるわ！」

上から口調にイライラしていたカイルは一気に加速し、一撃で決めるつもりで正面から斬りかかる。

しかし、簡単に防がれてしまう。

「おいおい、その程度か？」

「クソッ！」

カイルは飛び下がり、間合いを空ける。

（俺の力じゃ、力負けして簡単に防がれる。手数で勝負や。）

カイルは、ナイフを左手に逆手で構える。

先ほどと同じように、正面から突っ込み斬りかかる。

これも防がれてしまうが、先ほどと違い軽い攻撃である。体を回転させ、下からナイフを突き上げる。

しかし、これも避けられる。

（まだや！）

さらに、ナイフに遅れるように、違う軌道で剣を振り上げる。

（獲った！）

がら空きの胴に向かい剣が振り抜かれる。

「甘い！」

ガッツ！

入ったと思われた一撃は防がれ、バルスの蹴りが飛んでくる。

（ヤバイ！）

咄嗟にガードするも、ガードごと5メートル程、吹っ飛ばされる。

（なんて力や、これはヨーコ以上やぞ。とにかく、手数で押しきる！）

カイルは防がれるのを覚悟で攻撃し続ける。

しかし、やはり防がれ、何度も吹っ飛ばされる。

はあ、はあ…

「ずいぶん息が上がってるじゃないか。もう終わりか？」

（あかん、このままやったら…。相手に攻撃させてカウンターを狙う！）

カイルは無防備に突っ込み、相手の攻撃を誘う。

だが、バルスには、読まれているようで攻撃がこない。

（クソッ！それなら！）

カイルは、後ろに周りこみ、背後から剣を振り落とす。

しかし、バルスはカイルを見ずに攻撃防ぐ。

そして、防ぐと同時に後ろ回し蹴りをカイルの腹に叩き込む。

ものすごい衝撃が、カイルの腹に走り、10メートルほど吹っ飛ばされ、地面を転がるようにしてカイルの体が止まる。

そして…

オエエエエ…

カイルは、昼間に食べた物をすべてリバーズしてしまった。

嘔吐物の中には、血が滲んでいる。

「これで終わりだな。」

バルスが出口に向けて歩き出す。

「はあ、はあ…おい、待てや…まだ、終わってないぞ。」  
フラフラになりながらも、カイルは立ち上がる。

「ほお、メンタルHの癖に、なかなか根性あるじゃないか。」

「ま、まだ、一撃も入れてないからな。」

「いいだろう、来い！」

バルスが改めて構える。

(体力も限界や…、一撃、次の一撃に賭ける！)

カイルは残りの力を振り絞り、バルスに向かい走り出す。

バルスとの間合いが詰まってきたところで、左手のナイフを投げる。そして自身は上体を低くし、一気に間合いを詰める。

ナイフを防ぐのに気を取られたバルスに、一瞬だけ隙ができる。

その隙に右に少し軌道を変え、上体を起こすと同時に、渾身の突きを放つ。

(貰った！)

渾身の一撃が、バルスの顔に向かう。

しかし！

「チッ！」

バルスは今までとは比べ物にならない速さで避ける。

そして、カイルの背中に強烈な一撃を叩き込む。

ドゴオッ！

鈍い音が響き、カイルの体が地面に叩き突けられ、ワンバウンドする。

鈍い音は、どうやらカイルの肩甲骨が折れた音のようだ。

カイルはそのまま意識を失った。

気絶したカイルを残し、バルスが出口に向かう。

「いくらなんでも、やり過ぎだよ。ギルド長。」

今まで見ていたヨーコがバルスに話かける。

「最後の攻撃が鋭かったんでついな。それに、2人の時は、師匠、もしくは、お父さんと呼べ！」

「はいはい、育てのお父さん。」

「つたく、誰に似たんだか、いい性格してるな。」

「で、どうなんだい？」

「合格だよ。あいつには明日、改めて来るように言え。」

見るとバルスの頬が薄っすら切れていた。

「大型ルーキーだ、俺が直々に育ててやる。」

そう言っただけながら、バルスは戻っていった。

「何が合格だよ。適正検査に元々合格も不合格もないだろうに。

とにかく、カイルを医務室に運ばないとね。」

そうしてヨーコはカイルを医務室まで運んで行った。

「どこやここ…。」

カイルが目覚めたのは、あれから5時間ほど経ってからだった。

「やっと気がついたかい。」

「ああ、どうやら負けたようやな…。」

「まあ、しょうがないさ、相手が悪すぎたよ。」

「あいつは何者なんや？」

「バルスは、このギルドの長で、あたいの育ての親でもあるし、師匠でもある人だよ。現役を退いているけど、元スタークラスだしね。」

「ヨーコの師匠で、元スタークラスか…、そら化物なはずやな…。」

「あんた、あたしも化物だと言いたいのかい？」

「決してそんな事は無いです。はい。」

「まあ、いいよ。それより体は大丈夫かい？回復魔法はかけてもらってるけど。」

「痛みはないよ。大丈夫や。」

「じゃあ帰るよ、明日もギルドに来ないといけないしね。」

「ん？俺、結局、一撃も入れられなかったんじゃ。」

「最後のが、掠っていたんだよ。それに、元々適正検査に合否は無いよ。現状の実力と適正を見るだけだからね。」

「じゃあ、何で俺はこんな事になったんや？」

「バルスの趣味だよ。あの人は期待の新人が入ると、自分で実力を見ないと気が済まないんだよ。」

「そんな理由かよ……。まあ、これでギルドに入れるし、もうこんな事は無いやろう。」

「……それなんだけど、あの人、あんたを気にいったみたいで、直々に鍛えるって……。」

「まじでか……。拒否権は……無いんやろうな。」

「無いだろうね。まあ、あたいの弟子になるんだから、しっかりと頑張りな。」

「頑張るしかないか……。まあ、強くなれるしいつかな。」

「やっぱり、あなたは適当だねえ。まあ、それがあんたのいい所でもあるか。」

「そうそう、考えてもしょうがないからな。」

「つたく、じゃ帰るよ。」

「はいよー。腹も減ったしな。」

リバスして、吐血までしたのに食欲があるカイルは、どんな胃袋してるのか不思議だが、明日から始まる地獄の特訓など知らないカイルは、るるんでヨーコと2人で、マリアさんと旦那さんとおいしい料理の待つ宿に帰っていくのだった。

もちろん、起き上がる時によるける振りをして、ヨーコの胸の谷間にフェイスを『イン、ザ、ボイン』して、ヨーコのビンタを食らう、ドキドキイベントはキツチリ、カツチリ、当たり前のように消化してからであるが。



## 7話 適正検査のようだ（後書き）

次話から特訓に入ります。

ちよつとペースアップしないと全然ハーレムにならないですよね…。

設定段階では、後3人ほどヒロインがいるのですが…。

誤字、脱字、ご意見、ご感想、批判、などなどお待ちしています。

**8話 3ヶ月の地獄です。(前書き)**

お時間頂いた分少し長めです。

相変わらず、設定に四苦八苦しています。

## 8話 3ヶ月の地獄です。

適正検査の翌日から3ヶ月、バルスの特訓は地獄の日々だった。

初日にいきなり、

「とりあえず、走れ！」

との一言で町の外周をひたすら走らされ。

2日目は、

「剣は素振りが基本だ。とりあえず振れ！」

と、ひたすら素振りをさせられ。

3日目は、

「お前は変則二刀だからナイフも振つとけ！」

と、ナイフをひたすら素振りさせられ。

4日目は、

「じゃあ、今日は剣とナイフ両方振つとけ！」

と、ひたすら両方を振らされ。

5日目は、

「今日は体術やるから、これ殴って蹴つとけ！」

と、サンドバックをひたすら殴る蹴るをやらされ。

6日目は、

「今日はギルドの魔法講座を受けとけ！」

と、唯一の肉体を使わない、安らげる日を過ごし。

7日目は、

「何？金が無くなるだと。なら実戦がてらギルドの依頼で、魔物を狩れ！」

と、村近くに出る魔物をひたすら狩らされ。

この1週間を1セットとし、4セット、2日の休暇をあわせ1ヶ月。

倒れそうになれば、強制的に回復させられ、サボるうものなら鉄

拳制裁。

まさに、血反吐を吐くような（実際吐いても強制回復）な毎日だった。

たまの休みに、ヨーコとデート的な事をするも、疲れすぎて、ドキドキイベントを発生させられないほどに、カイルは疲れきっていた。

2ヶ月目は、基礎トレと体術1日、剣術訓練3日、魔法講座2日、ギルドの依頼1日が1セットになった。

この頃には、体が出来てきたのか少し余裕がでてきた。

魔法講座が増えたのは、

「まだ魔法が使えないだど？とつとと覚えろ！」  
と、増やされたのだ。

そのかいあつてか、なんとか、原理を覚え、魔力を感知できるようになった。

3ヶ月目は、

「お前、対人戦闘無いだろ。とりあえず、ヨーコと俺と模擬戦やるぞ！」

と、模擬戦4日、魔法講座2日、依頼1日の1ヶ月に変更された。模擬戦は、まさにイジメ！

ヨーコにぶつ飛ばされ、バルスにポコポコにされ、強制的に復活させられ、これが繰り返される。

地獄のしごきのループである。

そんな日々を過ごしたカイルは確実に強くなっていった。

最後の方では、ヨーコにもぶつ飛ばされないようになり、バルスにもポコポコにはされないようになっていた。それに魔法も使えるようになっていた。

この世界の魔法は、イメージが大切であり、大気中の魔力を体内に取り込み、形や現象をイメージし、放出する。

そのイメージを補助するのが呪文である。呪文はあくまで補助であり、唱えれば誰でも使える訳ではない。

イメージ力が強く訓練すれば、魔法名だけで魔法が使えるようだが、魔法を極めれば、まったくの無詠唱でも魔法を使えるようだが、そんなのは、スタークラス並の化け物だけだ。

大気中の魔力は、膨大な量があり、大量に取り込んでも無くなるものではなく、取り込める量は才能によって変わる。

それがマジックである。マジックは取り込める量であり、魔法の強さでもある。

だが、マジックが高くても、イメージ力が無ければ、高度な魔法は使えないようだ。

それに、なぜだか分からないが、この世界には、属性がある。もちろん、属性以外の魔法も使えるが、習得するのが難しい。簡単に小規模なものなら、多少の訓練をすれば使えるようになるが、大きな魔法になればなるほど、訓練する時間も増えるようだ。

カイルが魔法を覚えるのに時間が掛かったのは、地球には無い魔力を感知、認識するのに時間が掛かったためだ。

その分、イメージするのは簡単だった。地球で生きていた時に、どういった原理でその現象が起こるかを知識として取得しているし、漫画やアニメ、映画などにより、イメージするための要素は豊富にあったからである。

魔力を感知できるようになってから、1ヶ月で魔法を使えるようになったのはそのためだ。

カイルが習得している魔法は、ヨーコと同じ指ライター、風系魔法、オリジナル魔法である。しかも、イメージが安々とできるため、呪文なしに魔法名だけで（しかも適当）魔法を発動できる。

詠唱カットならセカンド並、魔法名だけならファースト並の魔法使いが出来るくらいなので、魔法を覚えて1ヶ月では、チートも

良いところである。

そして、さらに驚くべきは、オリジナル魔法である。

普通の魔法は誰かが昔に開発したオリジナル魔法であるのだが、時間をかけて何年、何十年と言う思考錯誤の後にできるものである。

だが、地球での知識があるカイルは、原理さえ解れば簡単に現象を再現できるし、今ある魔法を応用して使う事もできるので、数日でオリジナル魔法を創ってしまったのである。

3ヶ月の地獄の日々を生き抜き、成長したカイルにバルスは

「これまでの訓練の成果を見るために試験をする。」

と言い出した。

「試験には俺とヨーコも同行し、試験内容は到着してから発表する。」

バルスにそう言われ、カイルは荷物を手渡された。

中には2日分の食料と水、毛布、回復薬類、魔物避けの薬が入っていた。

3人は村を出発し、森沿いに1日歩いた所で野宿をし、翌日に森に入った。

森の中をしばらく進むと

「ここで、試験の内容を説明する。試験は単純だ、最近この辺りを縄張りしている盗賊団の壊滅だ。」

「盗賊団？そんなんがいるんか？」

「ああ、最近この辺で被害が増えている。まあ、規模は小さく、5人ぐらいの団らしいが。」

「壊滅って事は殺すんやな…。」

（俺が人を殺す…。俺にできるんか…。）

人を殺すと言う事が、カイルにプレッシャーとしてののしかかり、押し黙ってしまう。

（やはり、そうだったか。）

バルスはカイルが人を殺したことが無い事を予測していた。

一般的に、能力があるのに人を殺したことの無いとメンタルだけが低い事が多かった。

戦闘歴を聞いた時に、魔物だけだった事も大きいけど、カイルはそれが顕著に出ていた。

この世界では、日本のように平和では無い。  
平然と人の命を奪う奴等も多いし、それが日常的に起こっているのだ。

そんな世界で生きるには、自分の命を奪おうとする人に躊躇しては生きては行けない。

バルスは、カイルがこれから生きて行くために、今回の盗賊団壊滅の依頼を試験にしたのだ。

ヨーコを同行させたのは、もしカイルが動けなくなったりした時にカイルを守る為である。盗賊5人程度にバルスは負ける事は無いが、左腕の古傷がある状態ではカイルを守りきれるか分からないからだ。

「今からは会話は無しだ。慎重に進むぞ。」

バルスは剣を抜く、それに続きヨーコとカイルも剣を抜き進む。

そのまま慎重に進み、しばらくすると開けた所にボロ小屋が見えた。

バルスとヨーコが木の陰から様子を伺う。

それに習い、カイルも様子を伺う。

小屋の前には5人の男が火を囲い、酒を飲んでいた。

そして、少し離れた所には、まだ少女とも呼べるくらいの全裸の女が横たわっていた。

それを目撃したカイルは思わず飛び出した。

「あの馬鹿が！ヨーコは女を、俺はカイルのフォローに回る！」

「あいよ！」

飛び出したカイルに続き、バルスとヨーコも飛び出す。

カイルは一気に駆け寄り、瞬く間に1人を背中から斬り、もう1

の首を斬り裂いて、女と盗賊の間に立って構える。

「女はどうだ!」

カイルのフォローのためにやや後ろのに立つバルスがヨーコに叫ぶ。

「駄目だね。すでに死んで何時間も経ってる。それに…」

女には暴行を受けた後があり、体中にアザと男たちの体液だらけにされていた。

盗賊達が剣や斧を構え、何か言っているがカイルにはまったく届いていない。

カイルは一瞬だけ女の方を確認し、残りの盗賊達を睨む。

「バルスさん、こいつ等は俺に殺らしてくれ。」

「…わかった。」

バルスは剣を鞘に戻し、後ろに下がる。

「クソツ! お前らやつちまえ!!!」

真ん中にいたリーダー格の男が他の2人に叫ぶ。

斧を持った男が先に動く。

斧を振り上げて突っ込んでくる。

それに少し遅れるように、もう一人の男が剣を持って突っ込んでくる。

「遅い、遅すぎや!」

シュバツ!

斧の男に一瞬で詰め寄り、すれ違い様に首をはねる。

そのまま剣の男に向かい手首を斬り落とす。

カラン…

ブシャーアアア…

男の手が剣を握ったまま落ち、手首から鮮血が吹き出る。

「ぎゃああああ!!!」

男が痛みに悲鳴をあげる。

「五月蠅いわボケが!」

カイルは悲鳴を上げる男を蹴り倒し、

「ちよつと黙つてろや。」

まだ叫び声を上げる男の喉に剣を落とした。

「クソツ、こんな奴ら相手にしてられるか!」

リーダー格の男が、背中を向け走り出す。

「俺が、てめえみたいな奴を逃がすか!」

カイルは男に向け、手を伸ばし構える。

「奴の手足を切り刻め!旋風刃撃!」

ウインドブレイク

カイルが魔法を放つと3つの風の刃が男に向かう。

風の刃は男の手足を斬り落とし、男が地面に転がる。

カイルは転がった男に近寄る。

男はまだ生きているようで叫び声を上げている。

「てめえも五月蠅えよ!」

カイルは男の腹を蹴り上げ、うつ伏せに倒れていた男を逆に向ける。

「た、助けてくれ!お願いだ!」

男はカイルに涙を流して訴える。だが、

「何人の人がお前にそう言ったんや?あそこの女もそう言ったやろうが!」

カイルは男の腹を切り裂く。

内臓が飛び出し、鮮血が飛び散る。

「残りの数十秒間、今まで犯した罪を悔いるんやな。」

カイルは叫ぶ男に背をむけ、仲間の方に歩き出す。

男の叫び声は、10秒も掛からずに聞こえなくなった。

戦いが終わり、バルスとヨーコの元に戻るカイルだが途中で座り込みそして…

ヴェエエ…

怒りでブツ飛んでいた理性が急速に復活し、散らばる死体を目の当たりにし、人を殺してしまった事に耐え切れず、吐いてしまったのだ。

ヨーコとバルスがカイルに駆け寄る。

「人を殺すのを聞いて青ざめてた奴が、あそこまで冷徹になれていたので感心していたが、やっぱり耐え切れなかったみたいだな。」

「あたしも驚いたよ。でもなぜ、あんな残酷な殺し方をしたんだい？」

「俺も驚いてるわ…、あの子の姿を見た時に、昔の事を思い出してな、怒りで頭がぶっ飛んだんや。」

「昔のことつてなんだい？ 言わずらければいいけどよ…。」

「いや、聞いてくれ。かなり昔、俺がまだ幼い頃の話やねんけどな…。」

カイルには、幼い頃からの親友がいた、その親友には姉がおり、いつも面倒を見てくれていた。

まだ幼いながらも、親友の姉の事が大好きであつたし、初恋だつた。

そんな親友の姉がある時死んだ。

カイルはまだ幼かつたので何で死んだかも分からなかつた。

しかし、もう会えないことが、とても悲しく、いつまでも泣いていた。

カイルが大きくなるにつれ、親友の姉の死が理解できるようになった。

親友の姉の死は自殺だつた。

知らない男に襲われ、犯され、その後に高層ビルから飛び降りたそうだ。

その事実を知ってから、カイルは無理やり人を犯す奴等を心底憎むようになっていた。

カイルは、話を山奥の設定に合わせ、少し変えながら話す。

「そんな事があったのかい、でも、こんな奴等を殺して悔いる事は無いよ。あんたが殺らなければ、あたいが殺ってたよ。」

「そうだな、それに、お前が殺さなければ、もっと多くの人が被害にあっていたんだ。」

「それは分かっているんやけどな…、あかんな、こっちに来た時に覚悟は決めたはずやってんけどな…。」

「とにかくだ、まずは彼女だな。」

「そうだね、いつまでもあのままじゃあね…。」

「彼女を埋葬して、村へ戻るぞ。カイルはキツイなら、休んでろ。」

「いや、俺は大丈夫や、俺も手伝う。」

カイルは話して少し楽になったのか、顔色はマシになっていた。

カイル達は女の体を綺麗にし、毛布で包んだ後に埋葬し、カイルは彼女の墓に手を合わせた。

周辺を搜索したが、彼女の身分が分かるものは無く、他には何も無かったので、カイル達は村に戻っていった。

8話 3ヶ月の地獄です。(後書き)

今回もかなり賛否両論だと思います。

作者もかなり考えて書いたつもりですが、変な所は突っ込みお願いします。

魔法名が漢字なのは、某漫画の影響で完全に趣味です。

誤字、脱字、ご意見、ご感想、お待ちしています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6012s/>

---

異なる世界でセカンドライフ（職業？一応シーフです。）

2011年5月5日13時38分発行